

岩手医科大学歯学部小児科学講座

今回、我々は、乳歯ならびに永久歯に、著明なエナメル質形成不全が認められ、さらに Taurodontism, 永久歯の多数歯にわたる萌出遅延など、遺伝性エナメル質形成不全症に類似した非常にまれな症例に遭遇した。

患児は、初診時11歳10ヶ月の女児である。妊娠中の母体は、2ヶ月から出産まで、つわりがひどく、薬剤を服用していたが、当患児には、本症例に関連すると思われる既往はなかった。また、血液、尿検査、さらに外胚葉性器官にも異常はなかった。乳歯、永久歯は、萌出時より黄褐色を呈し、表面は滑沢で硬く肉眼的にはエナメル質は認められなかった。また、永久歯の萌出状態は不完全であり、どの歯の巾径も平均値より非常に小さいことから、各歯牙間の空隙は大きかった。

X線所見では、上下顎切歯にエナメル質の薄層が認められたが、他の歯では認められなかった。また、 $\frac{7}{17}$ は Taurodont tooth であった。歯髓腔においては、 $\frac{7}{17}$ を除いて、どの歯も、切縁あるいは咬合面壁に著明な二次象牙質、あるいは、象牙質瘤が認められた。また $\frac{5432}{3} \frac{134}{34}$ が未萌出である。

乳歯の組織学的所見では、咬合面あるいは切縁部にエナメル質は全くみられず、隣接面部にわずか一層認められた。研磨標本では、エナメル質は小柱が不規則で蛇行配列し、一部では、無構造であった。H・E染色では、有機成分の多いエナメル質の残存が確認された。

象牙質では、石灰化の低い部分が一部みられたが、大部分は正常構造であった。またセメント質では、一部エラメズ質を外側より被覆している像が見られたが、構造では、異常はなかった。

以上より、本症例は Witcop の分類する Taurodontism を伴った、滑沢型のエナメル質形成不全型(減形成)と思われた。処置としては、第1に残存乳歯の抜歯、第2に形成不全歯の歯冠修覆、第3に反対咬合に対し Chin cap の応用、第4に可撤式保隙装置を装置し、経過観察中である。

演題7 陶材焼付鑄造冠の臨床的適合度に関する検討

○石毛清雄, 三浦幹也, 草深英二, 塩山 司
石橋寛二, 杉岡範明*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
岩手歯科技工専門学校*

陶材焼付鑄造は、審美性、耐摩耗性、組織親和性、全部鑄造冠をもつ物理的特性などの点で多くの特長を有

し、当教室の調査結果からも明らかなように、日常の臨床で装着されているすべての陶材焼付鑄造冠が満足すべき適合を示しているとは考えにくい。

演者らは、実験的に検討されたものと臨床応用例とにおける適合の差異、および陶材焼付鑄造冠のより良い適合がさらに恒常性を高めていくための方策を検討する意味で、臨床的適合度の観察を試みた。当教室の臨床術式を用いて陶材焼付鑄造冠を製作し、装着し、支台歯と共に抜去した試料と、約2年前に本学附属病院にて装置された陶材焼付鑄造冠を支台歯と共に抜去した試料IIを用いた。試料I、IIの肉眼的観察を行った後、同試料をエポキシ樹脂脂リゴラックに包埋し、8分割を行い、冠辺縁の適合度、オーバーハング量、位置を万能投撮影にて計測した。

試料Iにおいて、肉眼的観察では残留セメント層が近心隣接面、頬側にみられたが、探針による診査では良好であった。計測結果は、辺縁部 $19\mu\text{m}\sim 98\mu\text{m}$ 平均 $47\mu\text{m}$ 、オーバーハング量 $-20\mu\text{m}\sim +141\mu\text{m}$ 、冠辺縁の位置 $-215\mu\text{m}\sim +7\mu\text{m}$ であった。試料IIにおいて、肉眼的観察では残留セメント層はみられなかったが、唇側の冠辺縁直下の支台歯に着色がみられ、探針での診査では唇舌側が不良であった。計測結果は、辺縁部 $50\mu\text{m}\sim 261\mu\text{m}$ 平均 $154\mu\text{m}$ 、オーバーハング量 $-129\mu\text{m}\sim +217\mu\text{m}$ 、冠辺縁の位置 $-453\mu\text{m}\sim +144\mu\text{m}$ であった。

試験症例の試料Iにおける計測結果から、日常の臨床においても従来の報告とほぼ同程度の適合が得られることが確認された。試料IIの適合度は試験症例に比べてかなり劣る結果が示されたが、実際に臨床に应用された陶材焼付鑄造冠の適合度に関する他の報告と比較すると、ほぼ同程度の値と考えることができる。

陶材焼付鑄造冠の適合度についてはまだ多くの問題が残されており、今後、歯科医師と歯科技工士の協同作業という観点から検討していく予定である。

演題8 ハムスター歯肉溝上皮下血管網と他の齧歯類との比較

○藤村 朗, 伊藤一三, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

実験的歯周炎に罹患しやすい小動物として、近年、ゴールデンハムスターが用いられているが、その歯周組織、特に歯肉内縁上皮下の毛細血管網構築に関する研究はほとんどなされていない。さらに、他の齧歯類との比較検討は全くなされていない。そこで今回、我々は実験動物として常用されるマウス、ラットおよび、愛玩用のシ